

「ビジネスマンにとって、年末年始はまとまった量の読書ができるチャンス。今年発売された新刊の中では、どの本を読めばいいのか。著名な経済学者、経営学者、エコノミスト21人に、今年お薦めの経済・経営書を挙げてもらった。その結果を大阪大学教授の大竹文雄氏が解説する。

大阪大学教授
大竹 文雄

たのび論争 日本経済危機の「2位」と「昭和恐慌の研究」(6位)だ。前者は90年代以降の日本の長期停滞の原因を巡って

専門家は職業的に広い範囲の本を読んで、いかに推し進めていこうとするか、本も多岐に渡り、集約的な意見ではない。その意味で、一人しか推薦していかなくても選者が一押しの本と、複数の人が推薦している本の2つを両面から重要だと評価するべきであろう。

実は、今回のランキングの13位に上がっている本には、各選者の今年のベストが多々並んでいる。しかし、すべての本を紹介することはできないので、「2位」は選者のコメントを引用しながら、ランキング上位の本を紹介することにしよう。

上位には、複数の人が推した本が並んでいる。そうした著作は、その質が高いことに加え、今年重要なテーマになったものが多い。

日本企業の勝ち組と負け組がはびかりしてきた経済状況を背景に、日本企業の強さや弱さを分析したが、「日本のもの造り哲学」(1位)と「戦略全」の論理(3位)と「三冊ある」前者は「権の行使」と「組み合わせた」キーワードから日本企業のさまざまな経営戦略を示す。後者は「戦略モデル」の効率は高いが、「戦略が弱」という問題を明らかにしている。共に「日本のテーマを明快に解説してあり、読み応えがある。ラブレットと経済政策を論じて

日本企業の力に関心

エコノミストが選ぶ 経済・経営書

順位	書名	著者名	出版社	価格	獲得得点
1位	日本のもの造り哲学	藤本隆宏著	日本経済新聞社	1,600円	22点
2位	論争 日本の経済危機	浜田宏一、堀内昭義ほか編	日本経済新聞社	2,500	15
3位	戦略不全の論理	三品和広著	東洋経済新報社	2,600	11
4位	新しい金融秩序 「人口減少経済」の新しい公式	ロバート・小・シラー著 松谷明彦著	日本経済新聞社 日本経済新聞社	3,200 1,900	10 10
6位	昭和恐慌の研究 ジョブ・クリエイション 日本経済 見えざる構造転換	岩田規久男編著 玄田有史著 西村清彦著	東洋経済新報社 日本経済新聞社 日本経済新聞社	3,600 3,600 1,600	9 9 9
9位	信頼と安心の年金改革 なぜ日本は行き詰ったか 希望枯渇社会	高山憲之著 森嶋通夫著 山田昌弘著	東洋経済新報社 岩波書店 筑摩書房	1,500 2,500 1,900	8 8 8

デフレやリスク対策本も

ミクロの視点から日本経済を論じているのが「日本経済 見えざる構造転換」(6位)だ。この本は90年代以降の長期停滞を「長引く景気回復過程」と「金融政策の立場から」の評価を試みた論である。先の「三冊」を前述に難しいうかがいが、相手を論駁しようとする著者の熱気が随分伝わる力作である。

「経済学者・エコノミストが徹底的に討論し尽くす。衝突の激し、後者は「昭和恐慌の原因とその脱出過程」について、当時のメディアや文献を駆使しつつ、金融政策の立場から「評価を試みた論の論である。先の「三冊」を前述に難しいうかがいが、相手を論駁しようとする著者の熱気が随分伝わる力作である。」

「希望」格差が拡大しているという指摘。潜在的なリスクの厳しさを著者に問題提起している。これについては、出版側と研究者側の双方に問題がある。出版はリスクを恐れて実績のある書き手の出版のみを受け、優れた若手研究者の出版機会を奪ってしまっていたのではないかと、一方、若手研究者は専門論文の出版だけに集中して、研究成果の社会還元を怠ってきたのではないかと。後者の問題は、大学や学会における評価制度とも密接に関連している。経済学の目的が経済厚生を高めることである限り、研究者が研

「私たちにその栄光と挫折の歴史を生かして伝える。『なぜ日本は行き詰ったか』(9位)は、「日本の過去・現在・未来をまきなタケル」で描いており、そのスケール感が最大の魅力になっている。

歳入増の拡大とそれの対応策を論じているのが「新しい金融秩序」(4位)と「希望格差社会」(9位)の二冊である。前者は「今後数年は金融問題を引き起こす」として本であり、リスクの拡大に対して具体的な策として金融技術を使った保険制度を提案している。一方、後者は、現在時点での格差より将来の所得格差、将来の地位格差との

「希望」格差が拡大しているという指摘。潜在的なリスクの厳しさを著者に問題提起している。これについては、出版側と研究者側の双方に問題がある。出版はリスクを恐れて実績のある書き手の出版のみを受け、優れた若手研究者の出版機会を奪ってしまっていたのではないかと、一方、若手研究者は専門論文の出版だけに集中して、研究成果の社会還元を怠ってきたのではないかと。後者の問題は、大学や学会における評価制度とも密接に関連している。経済学の目的が経済厚生を高めることである限り、研究者が研

12位	財閥解体 GHQエコノミストの回想 エリノア・M・ハドレーほか著 東洋経済新報社 2,200円 7点
	帝国からヨーロッパへ ジェフリー・オーウェン著 名古屋大学出版会 6,500円 5点
	封印される不平等 橋本 俊昭編著 東洋経済新報社 1,800円 5点
	日本の新しいルール 田中 直樹著 講談社 1,800円 5点
	デザイン・ルール カリス・V・ポールドウィン、キム・B・クラーク著 東洋経済新報社 5,200円 5点
	20世紀とは何だったのか 佐伯 啓思著 PHP新書 740円 5点
	現代日本の市場主義と設計主義 小谷 清著 日本評論社 2,800円 5点
13位	日経(上・下) 李田 真吾著 新潮社 各1,500円 5点
	ゼロ・トヨタウェイ(上・下) ジェフリー・ライカー著 日経BP社 各2,200円 5点
	日本電力産業発展のダイナミズム 横川 武郎著 名古屋大学出版会 5,800円 5点
	対日直接投資と日本経済 深尾京司、天野倫文著 日本経済新聞社 3,600円 5点
	制度と文化—組織を動かす見えない力 佐藤勝彦、山田真茂編著 日本経済新聞社 1,900円 5点
	富の競争 福井 秀夫著 日本経済新聞社 1,600円 5点
	女性たちの平成不況 樋口美雄ほか編 日本経済新聞社 1,800円 5点

日本のもの造り哲学
藤本隆宏著

論争
日本の経済危機
浜田宏一、堀内昭義ほか編

戦略不全の論理
三品和広著

新しい金融秩序
ロバート・小・シラー著
松谷明彦著

人口減少経済
松谷明彦著

今日、人口減少も大きな社会問題になっている。通常は悲観

回答者は次の21人(アイウエオ順)。池尾和久(慶応義塾大学教授)▼伊藤隆敏(東京大学教授)▼伊藤元重(東京大学教授)▼今井賢一(スタンフォード大学名誉シニアフェロー)▼大竹文雄(大阪大学教授)▼奥村洋彦(学習院大学教授)▼加藤野史(神戸大学教授)▼金井壽宏(神戸大学教授)▼小西砂千夫(関西学院大学教授)▼鹿野雄二(UFJ総合研究所投資調査部長)▼高橋進(慶応義塾大学教授)▼高橋伸彰(立命館大学教授)▼宅宗彰吉(三井住友アセットマネジメントチーフエコノミスト)▼橋本俊昭(京都大学教授)▼寺西重郎(一橋大学教授)▼西村清彦(東京大学教授)▼宮本宏(大阪大学教授)▼八代尚宏(日本経済研究センター理事長)▼吉田和男(京都大学教授)